

第 8 回

朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える

全国交流集会 in 松江

追 加 資 料



1997.7.26~27

第 2 分 科 会

広島県 比婆郡 高野町 ・ 双三郡 君田村

高暮ダム小史とわれわれの歩み

- 強制連行・強制労働の真実を求めて -

『高暮ダム強制連行を調査する会』

《事務所・連絡先》

〒729-43

広島県 双三郡 三良坂町 2, 722-1

福 政 康 夫 (YASUO FUKUMASA)

(TEL & FAX 0824-44-2176)

高暮ダム小史とわれわれの歩み

(こうぼ)

高暮ダム強制連行を調査する会

(世話人代表 福 政 康 夫

広島県 双三郡 三良坂町)

【 参考資料 】

1980, 6, 1 双三教育研究所僻地教育部会発行 『江の川』

1989, 7, 25 三次地方史研究会 発行

『戦時下 広島県高暮ダムにおける
朝鮮人強制労働の記録』

1981, 6, 10 佐々木博子 著 『男たちの遺書』

1985, 3, 1 三次地方史研究会 『三次の歴史』

1988, 3, 25 林 えいだい 著 『朝鮮海峡 深くて暗い歴史』

1989, 8, 30 林 えいだい 著

『消された朝鮮人強制連行の記録・
関釜連絡船と火床の坑夫たち』

発行年月日不祥

『君田村樫田（ひつた）誌』

1. 高暮（こうぼ）ダムの地形的条件。〔文末掲載の略地図参照〕

- ◎ 中国山地に位置する高野町 大万木山・猿政山といった、1200m級の山々を水源とした神野瀬川が、双三郡君田村(きみた)樫田（ひつた）へと、約30kmの谷間を流れる。
- ◎ 谷の両側は、300mの切り立った山。谷幅は狭い所で、100m、平均谷幅2～300mのV字型の地形。
- ◎ 1915年 広島→三次間に開通した『芸備鉄道（げいびてつどう）』（現 JR 芸備線）（㊟ この工事韓国人死者あり）でもに使用された枕木は、この地から切り出された栗の木で、神野瀬川（かんのせ）の流れを利用して、上流から一日一万本も流され、三次(みよし)へ集積された。（一本の長さ7尺 約2m10cm）
- ◎ この谷を利用して「高暮にダムを」という建設計画は、大正時代から何度か起こっていたが、具体化したのは昭和初期になってから。

2, ダム建設の経過と状況。〔文末掲載の工事計画組織図参照〕

◎ 1940年3月15日起工式。日本発送電株式会社（日発）が、奥村組に施工を請け負わせた。更に下請け負いを『和田組』（会社所在現在不明）にさせた。

◎ 工事計画は、高野町と君田村の境に堰堤を築き、神野瀬川（かんのせがわ）の水を貯え、その水をトンネルによって、君田村沓ヶ原（くつがはら）に建設する神野瀬発電所（昭和10年11月30日認可）へ送って使用し、その水を沓ヶ原調整ダムに一旦放水し、さらに、トンネルによって下流6駅の君田発電所へ、さらに下流7駅の森原（もりばら）発電所へと送り西城川（さいじょうがわ）に放流する。

◎ 建設当時、中国地方では最大のダム工事であった。

◎ 1940, 3, 15 起工式を行う。

◎ 1940末, 戦争のため建設用物資が不足し一時中止、搬入路の建設に集中。

◎ 1941, 12 沓ヶ原（くつがはら）堰堤完成。

◎ 1942, 君田発電所営業運転開始。高暮ダム建設に集中。

画期的な大工事であるこの建設工事に必要な大量の砂・セメントは、到底、道路を利用しての搬入は、特に積雪の多いこの地域での冬場は不可能であった。そのため、現場までの道路建設に併せて、三次駅（現在のJR芸備線西三次駅）から高暮まで索道（ケーブル）を張り、その間、日下（ひげ）・宮ヶ原・沓ヶ原の三箇所に中継集積駅を設けた。

三次からは、セメントや工事関係者の一部生活必需物資を載せ、日下からは砂を積み、沓ヶ原までは搬器（バケット）一台にセメント五俵を積み、沓ヶ原から高暮までは七俵積んだ。搬器は約50㍎毎に吊り下げ連結されており、毎秒2㍎の速度で動いた。

広島県北部に位置するこの高野の山間部は、冬季の積雪時2㍎を超す積雪量であり、道路の利用が出来ないときにも、索道の運転は出来たので工事の主役であった。

この搬器を吊り下げた索道に油を塗布する作業も、地上から30㍎もある空中での作業であり苛酷を極めた。沓ヶ原の集積駅に近い場所では、油塗布作業員6名が墜落事故に遭遇し、そのうち4名が死亡している。

沓ヶ原ダム工事に必要な砂は、日下方面からの輸送でだいたい賄うことが出来たが、更に大規模な工事である高暮ダム堰堤工事に必要な砂は、到底賄うことが出来ず、そこで、沓ヶ原地区に大製砂場を建設し、神之瀬川の砂利を採取したり、沓ヶ原集落から500㍎以上離れた山を崩し別の索道を引き、製砂場の土砂を上方に運び、今谷川の水を利用して洗砂し、採石・砂

を現場へ搬入した。

このような方法の資材搬入は、高碁ダム上流にもあった。現在もその砂利採取場は姿をとどめている。

- ◎ 1944, 12 神野瀬発電所・高碁→神野瀬発電所トンネル完成。
- ◎ 1945, 2 高碁ダム堰堤の42%完成し、送水開始。
神野瀬発電所運転開始。このころより戦争によって、資材不足で工事の一時停止状態となる。
- ◎ 1946, 4 日本発送電職員40名、人夫20名で日発が直接工事を再開。
- ◎ 1946, 12 オイルタンク爆発・神野瀬発電所全焼。この事故による死者6名、重傷者2名という。
- ◎ 1948, 4 奥村組工事再開。
- ◎ 1949, 12 高碁ダム工事完成。

1945年の敗戦を挟んで、前後10年の歳月と、幾多の犠牲者と苛酷な極限的労働を強いた韓国人の強制労働によって大工事が終了した。

3, 韓国人強制労働の状況。

- ◎ 朝鮮半島から直接、労働者が送り込まれたのは、1940年夏ころであった。
- ◎ 1910年8月 日韓併合以来、1946年までの間、我が国へ送り込まれた韓国人の数は実に2,356,263人と記録に残っている。それらは、強制連行・自主渡航と形態は異なるものの、このような結果になった要因が、日本国が朝鮮半島への侵略をおこない植民地支配したことにあるのは言を俟たない。
- ◎ 高碁ダムへも1940年夏から秋にかけて、トラック一台に30人から40人を載せて、毎日のように運ばれている。
- ◎ 今も、当時の正確な数が掴めないままであるが、これらの人数は2,000人とも3,000人とも言われている。『いや、ピーク時には5,000人は居たのではないか』とさえ言う現地の人もいる。

- ◎ その間、『半島人』『義勇隊』と呼ぶ人もあったが、奥村組の関係者たちは『集団』と呼んでいた。彼らはカーキ色の労働服に番号札が縫い付けられたものを着せられ、日本語が話せないので一見してすぐに判ったという。
- ◎ 『集団』の名が示すとおり、彼らの一人一人には、人格を有する『人間』として初めから認めず、セメントや碎石と同じ『原料』『消耗品』に過ぎなかったのである。日本人労務管理者や朝鮮人飯場頭からは、『オイ』『コラ』『○番』と呼ばれた。
- ◎ 苛酷な労働に耐え兼ねて逃亡する者も数多く、逃亡した労働者を夜を徹して探す作業に、多くの地元の人達が狩り出された。
- ◎ 地理も分からず逃亡した労働者の中には、付近の山中をさ迷った揚げ句、再び高暮のダム近くに戻ってしまった人もいたという。逃亡者を捕らえると、荒縄製のモッコに入れ、ウィンチで吊って水の中に漬け、息も絶え絶えになると引き上げ、また漬ける、というようなリンチを繰り返したという。
また、真冬に捕らえられた脱走者の中には、裸で柱にくくりつけられて、頭から水をかけられた者もある。この人は朝になると死んでいたという。
- ◎ 苛酷な労働の中で逃亡・病氣・死亡とその数が減れば、また新たに半島から『補給』すればよかっただけである。
- ◎ 現地の人々の何人かから、このダムを、『白骨ダムと呼んでいるのですよ。』と言う言葉を聞いている。
- ◎ 家族ぐるみこのダムで働かされたという三次市在住の『松村（日本名）』のおばあちゃんからは、『詳しいことはわからんが、ダムの堰堤にはすくなくとも40人から60人の人が埋まっている。』と言う証言や、当時の生活の一端として、『家族持ちの労働者たちの住居は、現在の堰堤の上流側に並んでいた。』『食うものが無く、山に入ってワラビなんかを取って食べましたよ。』『寒いときには困りましたよ。食べるものが無く、こどもがいたのでとても困りました。』等々の生々しい証言も得ている。

こうした数々の実態を基にして、工事を担当した日本発送電（現 中国電力）・奥村組に、当時の資料提供をいくら要請しても、『当時の会社と現在の会社は関係がない。』（奥村組）『原爆で資料がなくなった。』（中国電力）と、非人間的な労働を強い、尊い人命を奪い個人の尊厳を無視してきた事実を覆い隠そうとしており、こうした事実を歴史から抹殺させようとしている。

ここ高暮ダムに足を運ぶたびに、いやでも目に入る日本発送電・奥村組が建立した『慰霊碑』

の碑文の白々しさに憤りをおぼえる。

高暮ダム周辺の姿も刻々変化させられ、当時を語る『生コンクリート製造所』も、先年姿を消してしまって、ダム周辺を何事もなかったかのような観光地化させようとしている。

現在（１９９７年７月）当時の状況を残すものとしては、対岸の『生コン製造所』から渡されたケーブルを張ったコンクリート製の三角支柱がわずかに残っているのみである。しかし、この三角支柱も早晚撤去されるであろう。

ここに現在設置されている無人スピーカーのボタンを押すと『ダムのこと』は、流れてくるが、その解説の一言半句にも『朝鮮半島からの非人道的強制連行されてきた、多くの人々の血と汗と涙によって、このダムが出来た。』と言う言葉は全く聞くことができない。

高暮ダムに足を運ぶ度に、何事もなかったかのように、湛える水面と、１００ｍにもおよぶ巨大な堰堤のコンクリートに、限らない憤りと罪の深さを覚える。

しかし、周辺がいくら姿を変えようとも、ダム周辺の草深い荒野に眠る幾多の無縁仏の発掘をつづけながら、無縁の佛様たちの限らない望郷の念を、そしてまた、異国の山中に描き続けたであろう遠い祖国への空しい思いを、われわれは決して忘れない。いや忘れてはならない。

当時の事実を知る人が高齢化して少なくなり、聞き取りに行っても当時を語る人に会うことが極めて希になってきている。

しかし、真実を覆い隠させないためにも、次代へ語り継ぐためにも、真実をあばいていく行動をつづけなくては、再びこのような非人道的なおこないを、またいつの日にか繰り返えさないとも限らない。

彼らをここに追いやった日本人のひとりとして、この事実を忘れてはならない。朝鮮人強制連行労働者の無縁佛の発掘と、祖国への声なき返還という営みが、決して許してはいただけないであろうことは十分知りながら、それでもささやかな謝罪としての行為を続けている。

４、 県北の荒野に無縁佛を求めて。

1986, 10, 13,	『宋 炳守』さん	43年後の声なき帰国。祖国へ埋葬。
1988, 4, 4,	高暮ダム犠牲者遺骨	2体 三次市専法寺より。
1988, 9 30,	比婆郡口和町金田	1体発掘。
1988, 10, 28,	比婆郡口和町金田	1体発掘。
1989, 3, 19,	三次市青河 芸備鉄道犠牲者	4体発掘。
1989, 3 22,	三江線犠牲者	1体発掘。
1989, 3, 24,	比婆郡高野町西教寺	3体発掘。
1989, 3, 30,	比婆郡東城町鉄道工事犠牲者	1体発掘。
1989, 4, 2,	高暮ダム周辺	1体発掘。
1989, 4, 3,	同場所	1体発掘。
1989, 4, 4,	同場所	1体発掘。

※ 第一次合同法要举行。(三次市 照林坊) 4月 5日 16体祖国返還埋葬。

1989, 6, 16,	高暮ダム周辺	1体発掘。
1989, 11, 4,	同場所	1体発掘。
1990, 8, 11,	同場所	1体発掘。
1990, 8, 19,	同場所	1体発掘。
1991, 9, 16,	比婆郡東城町(こども)	1体発掘。
1991, 9, 18,	比婆郡東城町(こども)	1体発掘。
1991, 9, 22,	比婆郡東城町(14歳女性)	1体発掘。

※ 第二次合同法要举行。(三次市 照林坊) 10月14日 7体祖国返還埋葬。

1993, 9,	高暮ダム周辺	3体発掘。
1997, 7, 13,	双三郡君田村櫃田沓ヶ原	3体発掘。

5, 今日までのあゆみ。

◎ 会の結成と機関紙発行。

- ・ 1996年組織づくり。
- ・ 機関紙発行。
- ・ 会員募集。

◎ 強制連行・強制労働生存者追跡調査の実施。

1996, 9, 23, ~ 28, 第一次渡韓調査実施。

高暮小学校下高暮分校の卒業生名簿を入手し、この名簿に記載されていた卒業生4名の本籍地を訪れ調査したが、生存関係者には会うことができなかった。

卒業生名簿に記載されている22名のすべてを調査することが未だできていないが、相当な日数を要することが予想されるが、ぜひやり遂げなくてはならない。

1997, 4, 20, ~ 25, 第二次渡韓調査実施。

韓国大邱MBS制作のテレビ番組『平和日本ふたつの顔』(広島RCC放映)に、《高暮ダム生存者》として登場された『李 相潤』『黄 圭南』の両氏のことを知り、早速 韓国全羅南道谷城郡に飛んだ。しかし、李さんはすでに亡くなっておられ、長男の東烈さんに会うことだけはできた。もう一人の黄さんには会うことができ、当時のことを語っていただくことができたが、だんだん話が進むにつれて、“黄さんが連行されていたのは高暮ではなく、安野発電所ではなかったのか”という疑問が生まれ、同行した藤田氏(安野発電所中国人強制連行を調査している)の

質問を重ねる中で、間違いなく西松建設による安野発電所への強制連行であると確認できた。

この黄さんは、広島被爆者でもあることが分かり、帰国後、在韓被爆者渡日治療広島委員会の方に連絡し、現在、韓国原爆被害者協会全羅道支部長にも情報を入れている。近々にも被爆者手帳の取得への具体的とりくみを始める予定である。

この第二次調査を行うに当たって、現地 谷城郡・和順郡のふたつの郡庁を訪れたが、谷城郡での崔 淑柱内務課長と和順郡 林 興洛郡守おふたりの対応の適切さに、日本の役所で見ることはできない真摯な態度を見せられたことは強く印象に残った。

このふたつの郡で、《日本への強制連行関係者の調査》をただちに進めるという返事をいただき感謝の限りである。

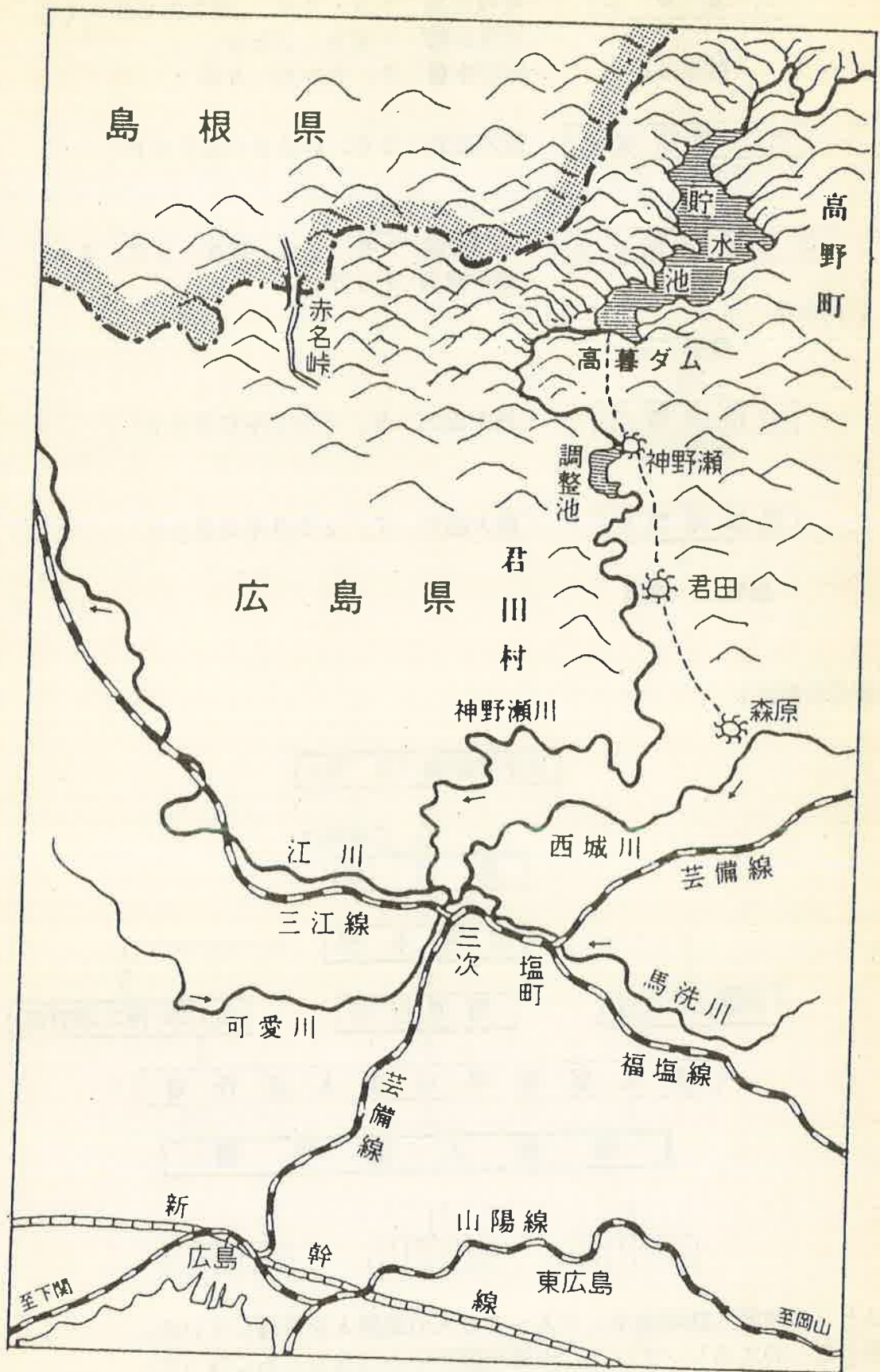
その後、現地 谷城郡からの経過報告で『43名の申告があり、この内26名が亡くなっており、16名が生存。1名が行方不明』という報告を受けている。この16名の調査も急がなくてはならない。

6, おわりに。

日本国政府も企業も、『真実をできるだけアイマイにし、自由主義史観とか自虐史観とかを“渡りに船”と悪用しながら』当時の真実を知る人の死滅するのを待っているのだろうか。“死人に口なし”という状態を作りたくてウズウズしているとしか思えない。

渡韓調査の僻村で、われわれに歩み寄り、『あなたたちどこから来たの？日本の人でしょう？』と一人の老人が声をかけてきた。われわれの目的を簡略に話すと、『わたしも日本北海道の炭鉱に徴用されていた。とてもたくさん苦勞したよ。賃金はとうとうもらえなかったよ。』『わたしは朝鮮人として面事務所に勤めていたが、日本から言って来た徴用の人数が集まらないので、お前も行けと言われて仕方なく北海道に行った。』と、積る話を聞いてくれと言わんばかりの積極さで、『あそこの店はわたしの娘がやっているから昼飯を食べながら話そう。』と言われた。慌ただしい日程で動いているわれわれの事を伝え、老人のお名前だけを聞き、後ろ髪を引かれる思いでその場を立ち去らなければならなかった。老人は『郭 徳龍です。』と達者な日本語と実にしっかりした書体で名前を書いて、『ぜひもう一度ここに来てください。』と言いながら、われわれの車にいつまでもいつまでも手を振っておられた姿を忘れることができない。

“死人に口なし状態”をつくることを絶対に許すことはできない。われわれのささやかな行動によってひとつひとつ積み上げている、国家と企業による犯行事実を、広汎な運動家・実践者とともに検証し合いながら、『自由・平等・正義』という理想にたいする責任を果たすという新しい歴史と伝統をつくりあげたいものである。



高暮ダム の 概 要

(戦時下広島県高暮ダムにおける

朝鮮人強制労働の記録より)

高 暮 ダ ム

- ・堰堤比高 69.4 m ・ 長さ195.7 m
- ・湛水面積 185.2 万㎡
- ・総貯水量 3,965.8 万㎡

隧道 4 km



神 之 瀬 発 電 所

- ・最大出力 20,000 キロワット

隧道 1.2 km



沓 ガ 原 調 整 ダ ム

- ・堰堤比高 19.5 m ・ 長さ106.2 m
- ・総貯水量 75 万㎡

萩川水路 ⇨

隧道 6 km



君 田 発 電 所

- ・最大出力 9,620 キロワット

隧道 7 km



森 原 発 電 所

- ・最大出力 7,200 キロワット



西城川へ放流

【工事の仕組み】

日本発送電 (日 発)

↓ 工事発注

奥 村 組



現 地 本 部



高暮ダム担当



隧 道 担 当



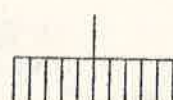
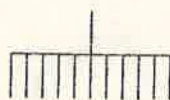
沓ガ原・神之瀬担当



各 工 区 毎 の 日 本 人 責 任 者



朝 鮮 人 飯 場 頭



- ・ひとりの朝鮮人飯場頭が10人～30人の朝鮮人を管理していた。
- ・脱走者へ加えるリンチは、この飯場頭が中心になっておこなった。
- ・当時、食糧・たばこ・酒は配給制であったので、会社側は受給人数の水増し報告をして“横流し”をしたり社員で“山分け”をするのは日常茶飯事だった。

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

第 二 章

追悼碑の建立と日本民衆の歴史認識の変革について

三重県木本で虐殺された朝鮮人労働者(李基允・裴相度)の追悼碑を建立する会

関東大虐殺2年4月後

1926年1月3日に、三重県熊野市(当時木本町)で朝鮮人労働者李基允氏(25歳)と裴相度氏(29歳)が、熊野市の在郷軍人を先頭とする住民集団によって殺されました。傷だらけにされた遺体は殺害現場の近くの極楽寺に何日も放置されました。このとき在郷軍人や消防組員らに出動を要請したのは木本町長でした。この虐殺の行政責任は明らかです。

虐殺57年後に

1983年3月付で熊野市は、『熊野市史』(上、中、下)を発行しました。その中巻(近現代篇)には、熊野市民の朝鮮人労働者襲撃・虐殺は「素朴な愛町心の発露」であったと書かれていました。この箇所の筆者は、熊野市教育委員会事務局内におかれた熊野市史編集委員会の常任委員岡本実氏でした。かれは、熊野文化協会(会員数560人)の会長でした。

63年後からの出発

1988年6月4日に、わたしたちは、裴相度氏の二男裴敬洪氏を釜山から迎え、大阪で会の結成集会をもち、その翌日ただちに熊野市に行き、『熊野市史』の書きかえ・追悼碑建立に協力することなどを要求して熊野市との「交渉」をはじめました。

それ以来これまで8年間、わたしたちの会は、熊野市に行政責任をとることをもとめるとともに、熊野市と熊野市教育委員会に、『熊野市史』の書きかえと謝罪を求めてきましたが、いまでも、熊野市も熊野市教育

委員会も、朝鮮人虐殺を「素朴な愛町心の発露」であるとする『熊野市史』を書きかえようとしていません。

また、熊野市立図書館・教育委員会は、わたしたちの会の文書を自由に閲覧させようとしていません。

「素朴な愛町心」 ↔

「素朴な愛国心」

いまなお、どうして朝鮮人虐殺を「素朴な愛町心の発露」であるとするようなことが許されつづけているのでしょうか！ それを今日の分科会で、共に考え、熊野市と熊野市教育委員会にたいして抗議し、市史の書き換えを求める要請をおこなうことを提案したいと思います。

熊野市民のおおくが、『熊野市史』をいつまでも黙認していることが、熊野市が『熊野市史』の書きかえをしないですまされていられるおおきな理由ではないでしょうか。自分たちが住み働いている地域の歴史を直視し、現在の『熊野市史』を批判する熊野市民がおおくならなければ、「素朴な愛町心」が「素朴な愛国心」となる時が再びくるかも知れません。

『熊野市史』の思想

1994年に熊野市は、『熊野市年表』を発行しました。それは熊野市教育委員会内におかれた熊野市年表編集委員会が編集したものでしたが、そこには、

「木本トンネル工事に従事していた朝鮮人労働者と町民との間で「木本事件」が起こり、朝鮮人労働者2名の犠牲者が出る」

と書かれています。このみじかい文は、『熊野市史』の「木本事件」についての記述とおなじく、「事件」の本質をあやまって説明しています。

李基允氏と裴相度氏は当時の木本町民に虐殺されたのです。このとき、町民は、木本町長、木本警察署長、在郷軍人会長が町民の先頭にたっていました。2人の朝鮮人を虐殺したあと熊野市民は徹夜で、襲撃を逃れようとした朝鮮人を山狩りしました。

「木本事件」について、1994年にこういう文ができるのも、日本全体の政治・社会状況の反映だと思いますが、直接的には、事実をまちがってつたえている『熊野市史』があるからです。

『熊野市史』中巻（近現代篇）の総論には、

「我が日本は……惨敗をきつし、太平洋戦争だけでも、六百万人（民間人を含む）という、尊い犠牲のうえに、新しい戦後の時代を迎えた」

と書かれています。日本軍が殺害したアジア太平洋民衆の犠牲者のことが書かれていません。またこの総論では、1926年の朝鮮人虐殺が、「朝鮮人騒動」と表現されています。本文でも、南京大虐殺についてなんの記述もなく、「南京占領の報道が伝わると国民は一入感激し、町や村で祝賀会が続いた」と書かれています。

『熊野市史』上巻（自然篇、古代・中世篇、近世篇）には、「熊野の古代史を見ると、神武天皇を除いて考えることはできない」などと書かれています。

『地域史』の点検を！

侵略を肯定し、天皇制を肯定する『熊野市史』を書きかえさせることは、熊野地域だけの問題ではないと思います。日本の各地の都道府県史、市町村史のおおくに、『熊野市史』問題とおなじ性質の問題があります。『北海道史』も北海道の市町村史も、アイヌモシリ侵略史を「北海道開拓史」としています。

わたしたちは、これまで行政機関が発行した地域史

を書き換えさせた横浜の市民などの運動の経験から学ぶとともに、朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える交流集会に参加する個人・団体が、分担しあって、それぞれの地域の都道府県市町村史を総体的に点検することを提案したいと思います。

追悼石碑は一つの根拠地

1994年11月20日に、わたしたちは、裴相度氏の孫の裴哲庸氏ら遺族3人をむかえて、追悼碑の除幕式をおこないました。その後、会は毎年、11月に追悼式をおこなっています。

昨年の追悼式での出会いを契機にして、ことし2月に「紀州鉾山の真実を明らかにする会」が結成され、6月に「日本の侵略の歴史を明らかにするわかやまの会」が結成されました。これらの会は、地域の侵略の事実を明らかにすることを通じて現在と未来の日本の他地域・他国侵略を阻止する民衆の力をつよめていこうとするものです。

いま、日本の各地に、日本の他地域・他国侵略歴史のなかで犠牲とされたひとびとの追悼碑が建てられています。それらの追悼碑は、それぞれの地域の民衆のたたかいの拠点となっているのだと思います。

運動の展望

わたしたちは、おおくの方のカンパと努力によって建立した熊野市の木本トンネル前の追悼碑を拠点として、かならず『熊野市史』を書きかえさせることができると確信しています。「事件」のさい、朝鮮人とともに働いていた日本人労働者のなかに、在郷軍人らに立ち向かった人たちがいました。また、朝鮮人襲撃・虐殺に批判的な熊野市民もいました。「事件」のとき、朝鮮民衆と日本民衆の連帯もまた築かれていました。

民族差別と侵略にたいする民衆のたたかいのネットワークを強くしていくために、この連帯の歴史から学ぶことはおおいと思います。

‘韓国人強制連行・強制労働’ に対しての 韓国での研究現況

金 亨 国（中部大学校 講師）

1. 最近の研究動向について

今まで韓国の研究者達は植民地時代の韓国人強制連行と労働についてあまり興味を表明しなかった。研究者達は主に日本の帝国主義侵略に対しての抵抗の歴史に注目した。したがって、強制連行と労働についての真相の糾明は主に‘太平洋戦争犠牲者遺族会’等のような民間団体によって主導されてきた。しかし、このような研究はたいてい日本政府を相手に補償請求のためのものだったので体系的ではなかった。

幸い戦後50周年を迎えた1995年から2年にわたって韓国政府から研究費を補助してもらい専門の研究者達によつての調査ができ世論を喚起するきっかけとなった。この研究は植民地時代海外で犠牲になった韓国人の数と現地に残された遺骸現況を把握することを主な目的とした。対象地域は日本、中国、ロシア、南太平洋地域で、研究の結果は歴史の教育と遺骸の国内奉還、そして現地の慰霊塔の建立の基礎資料として使うことになっている。

2. 過去2年間の研究結果

戦時動員体制下で強制連行された韓国人のなかの犠牲者の規模はまだ明らかにされていない。日本での研究も地域別の研究は盛んに行われている反面、全体的な犠牲者の規模については言及されていないのである。

公式的な犠牲者の数に関しては日韓会談の中で韓国政府が死亡者 12,603 人（一般労務者）に対しての補償を要求した。一方、日本政府は軍人・軍属出身 22,182 人の死亡者と確認した。初年度の結果、犠牲者規模を推算することができたのだが最小数値にした研究結果を総合してみると日本に置いては強制労働による死亡者は5万人あまりで、軍人・軍属死亡者は7万人あまりだと集計された。

（関東大震災と原爆、従軍慰安婦の犠牲者は除く）次の年の1996年にはパク・キョンシク先生の協力で5,000人あまりの死亡者名簿が新たに見つかった。また、北海道の現地調査で、朝鮮人強制連行者3,000人の名簿を含めた関連資料を見つけ出した。このような結果は日本政府が発表した名簿の他にももっとたくさんの資料が残っているという根拠になる。一方、新たに確保した資料の中では「京畿道労務者写真名簿」と「半島労務者統理綱要案」、労務部発行の

「釜山往復」など朝鮮人強制連行の実態が糾明できる重要な資料が含まれている。

3. 韓国の政府記録保存所に所蔵中の資料について

現在、政府記録保存所に保管されている資料は4種類である。

- ①「旧日本陸軍在籍」(8,295人の死亡者名簿)：この名簿は被徴用死亡者連名簿で、道(日本の県にあたる)別に分類されていて、個人情報詳しく記されている。これを元に対日民間請求権申告者名簿が作成された。
- ②1991年3月日本厚生省から受け取った被徴用者名簿(90,804人)：労働省所蔵分(66,990人分)が中心で、1946年日本の16の県で調査した朝鮮人労働者の個人情報が収録されている。そして、大日本産業報国会で作成した殉職者(1,192人)名簿など民間人の保管資料も含まれている。
- ③1992年12月受け取った労働省保管の被徴用者名簿(17,107人)：主に北海道炭鉱関連労働者名簿である。
- ④1993年10月に受け取った朝鮮出身の軍人・軍属名簿(326,573人)：厚生省で作成したもので重複掲載された人員を除くと243,992人分で個人別名簿、診療記録、身上調査表などが収録されている。

4. 今後の課題

これからの強制連行・強制労働の糾明のための望ましい研究方向は未来志向でなければならないと思う。だが、過去史の清算と未来志向は真相究明と正しい歴史教育を前提とした上で可能になるものである。そして、12万人に達する犠牲者が出たにもかかわらず、現在韓国に奉還された遺骸はわずか5千余りである。したがって、現在までの研究を元に慰霊事業にも力を注がなければならない。

また、日韓両国の研究者が積極的に連帯して必要な情報の交換や現地調査などを遂行したいと思う。

若者たちへ、どう伝えるか

—「強制連行の足跡を若者とたどる旅」の経験から—

強制連行の足跡を若者とたどる旅

代 表 村 田 久

「強制連行の足跡を若者とたどる旅」は、公教育ではほとんど教えられていない、日本の朝鮮侵略と植民地支配、その背景のもとで行われた強制連行の歴史を若者へ伝えるために、1989年からスタディツアーを中心にした活動をおこなっており、サハリン（旧樺太）に強制連行され、置き去りされた朝鮮人の留守家族で組織されている「中蘇離散家族会」と交流を続けている。

今年で9回目を迎える「若者とたどる旅」の経験を通じて、若者たちとのコミュニケーションのあり方を報告したい。

指紋押捺制度撤廃運動の中で

これまで定住外国人に強要されていた外国人登録証切替時の指紋押捺制度撤廃を求めて在日韓国人の若者を中心に展開された指紋押捺拒否闘争は1985年の在日韓国人・朝鮮人の外登証大量切替の年には全国的な盛り上がりを見せた。

北九州では人権牧師と呼ばれた故崔昌華（チョエ・チャンホア）牧師が在日韓国人・朝鮮人の人権獲得闘争をおこなってきたこともあり、「指紋押捺制度を撤廃させる会・北九州」が在日韓国人と日本人の共同の運動体として誕生した。だが残念なことに、運動に参加した日本人の大部分は熟年世代であって、若者の参加が少なかった。

指紋押捺制度撤廃運動を中心的に担った熟年世代は、指紋押捺制度撤廃運動に日本人の若者の登場が少なかったのは、学校教育で、「何故70万人もの韓国人・朝鮮人が日本で生活しているのか」が教えられていない、つまり日帝の朝鮮侵略と植民地支配、強制連行の歴史教育がおこなわれていないせいではないかと考えた。そして、自分たちの気持ちを伝えたいという思いが、1989年夏の「強制連行の足跡を若者とたどる旅（略称 若者とたどる旅）」として実現した。

かつて強制連行された朝鮮人は玄界灘の荒波を関釜連絡船の船底に押し込められて下関に上陸したという歴史があり、「旅」の企画を詰める中で、玄界灘の荒波を追体験するために、「旅」の出発点を釜山に設定

しようということになり、さらに、日帝侵略の歴史を学ぶために「独立記念館」「旧朝鮮総督府」を見学コースに取り入れることになった。

中蘇離散家族会との出会い

「旅」を準備する中で、サハリンに強制連行され置き去りにされた朝鮮人の留守家族と、夫の帰りを待ちわびるハルモニ（おばあさん）のことを知ったスタッフは、おばあさんの話を聞く場を「旅」の日程に組み込むことにして、その相談のために留守家族の会を大邱に訪ねた。紹介状もなしに、片言の韓国語で事務所を訪れたスタッフは、李斗勲（イ・ドゥフン）中蘇離散家族会会長の快諾を得ることができた。

李斗勲会長の厚意で実現したハルモニの証言は、たいへん厳しいものであった。一口に言えば、「お前たちは話を聞いてどうするのか」ということにつきる。私たちははじめて聞くのだが、これまでに何人かのルポライターや写真家などのジャーナリストがハルモニに取材していたのだった。

ハルモニは消息のわからない夫のことをくわしく話し、その安否を調べてくれるようにと頼んだが、その後なんの連絡もなかったという。かつて日本人にだまされて夫を失ったハルモニは、また日本人にだまされたと怒りを私たちにぶつけたのである。

そのハルモニの厳しい表情と私たちに同行して国内の強制連行の跡地（筑豊・大牟田・長崎）を訪ねた李斗勲会長との交流が、その後の「若者とたどる旅」の

道筋を決定的なものにした。

「旅」の最後の夜、李斗勲会長は高齢化しているひとり暮らしのハルモニのための老人ホーム建設計画を話し、そのための「一枚の赤煉瓦、一握りの砂」カンパを訴えた。もともと一過性のイベントに終わらせないことを申し合わせての「若者とたどる旅」であったが、李斗勲会長の訴えを受けて、実行委員会方式で始まった「強制連行の足跡を若者とたどる旅」は運動体として、毎夏の「若者とたどる旅」の企画実行とサハリン記念館と呼ばれる老人ホーム建設協力のための募金活動（サハリン募金）が活動の柱となった。

市民運動の浮き沈みとは関係なく

「若者とたどる旅」の企画を思い立ち、サハリン募金活動や「旅」の準備に全力をつくしていた加藤慶二さんは、第3回「若者とたどる旅」が終わった後、ガンに罹患していることが分かり、92年5月に50才の若さで亡くなられた。「若者とたどる旅」は加藤さんの想いを引き継ぎ、サハリン募金活動と毎夏の「若者とたどる旅」を企画して、今年も第7回の「旅」をおこなった。

中蘇離散家族会の総会は、毎年8月15日の解放記念日（光復節）に大邱で開かれる。「若者とたどる旅」はその総会に参加し、その夜、ハルモニの証書を聞いて会食するのが恒例となっている。

はじめての「旅」で叱られたハルモニとも毎年会っているが、表情が和んできていて、6年間の交流の深さを実感する。これまでの「旅」に参加した人の総数は300名を越える。第1回の「旅」の時に中学1年

生だった若者がいまは大学生である。これらの若者が21世紀を担うことになる。「若者とたどる旅」は手作り未来に向けて種を撒く運動である。撒いた種が芽を出し、茎が成長して、花を咲かせ、実を結ぶまで、長い時間を見ておかねばならない。撒いた種のすべてに花や実を期待するのは無理かも知れないが、注意深く見守っていききたい。

市民運動に浮き沈みがあるのは当然のことであり、「若者とたどる旅」のスタッフを取り巻く環境も変わっている。

「若者とたどる旅」もご多分に漏れずに、後継者難であり、これからの展望に自信があるわけではない。疲れたときは、大邱のハルモニの和やかな表情を思い起こすことにしている。ハルモニが元気なうちは、そして自分も元気なうちは、たとえ少数になつても光復節には会いに行きたいと思っている。

若者たちへどう伝えるか

これまでの8回の「若者とたどる旅」への参加者は中学1年生から69才の高齢者まで多岐にわたっている。「旅」の中では世代間交流もおこなわれてきたが、「旅」を通じて「現代若者気質」を実感することもできた。

会場では、「現代の若者」へ、「日帝の朝鮮侵略と植民地支配、そのもとでおこなわれて強制連行・強制労働の歴史」と「それが今なお尾を引いている在日韓国人・朝鮮人への差別の実態」をどのように伝えるのかについて、報告したい。

賛同団体紹介

高槻むくげの会

高槻むくげの会は、在日韓国・朝鮮人と日本人が、共にいきいきと暮らせる社会づくりを目指し、さまざまな人権に関する活動を行っています。

1972年の会結成から、在日韓国・朝鮮人の地域子ども会活動と、一世の識字学校を2本の柱に、韓国・朝鮮語講座やチャング（民族音楽）講座などの文化事業のほか、「タチソ（高槻地下倉庫）」戦跡の保存運動や、戦後補償の問題など、民族差別解消にむけての取り組みを日々行っています。特に、昨今問題になっている従軍「慰安婦」問題については、「国民基金」推進の立場から、講演会や、演劇の公演主催などを初め、さまざまな活動を展開しています。

しかし現実には、在日韓国・朝鮮人の子どもに対する、学校現場での差別発言・差別事象の多発、一世のお年寄りに対する年金差別の問題、その他就職・結婚・入居などの人生における節目における差別など、未だに多くの課題が残されています。

私たちは、そのような日本社会の現状を踏まえた上で、日本人と在日韓国・朝鮮人のあるべき自然な関係を、真摯なまなざしで模索し続けて行きたいと考えています。

どうか、ご支援、ご協力をお願いします。

高槻むくげの会

〒569 大阪府高槻市城内町1-35

TEL. (0726) 71-1239 FAX. (0726) 61-6054

賛同団体紹介

報告

特別企画展

映像は語る

大阪の朝鮮人強制連行と強制労働

大阪府朝鮮人強制連行真相調査団

連絡先: 大阪市北区西天満6-6-11空野法律事務所 電話06-361-5488



西野瑠美子さん



シンポジウム・今歴史の真実を (1997.5.10)



「証言を聞く集い」で熱弁する
ファン・カプチョル氏 (右)

戦後半世紀を経過した今、朝鮮人強制連行・強制労働の被連行者は高齢になり、貴重な証言を得ることが非常に困難になっています。さらに、自然風化と急激な土地開発が進むなかで強制連行・労働の現場は、保存はもとより記録に残すこと難しい現状です。また、昨年から今年にかけて「従軍慰安婦は強制連行ではなかった」などといった歴史の真実をかき消そうとする論調が台頭しています。

そのような状況下で大阪府調査団と各協賛団体は、調査の過程で撮影した写真149点と多数の文献資料、実物資料、調査ビデオ、強制連行名簿(全国—402,032人)などを5月1日から18日まで大阪国際平和センター(ピースおおさか)特別展示室で一挙に公開しました。同時に「証言を聞く集い」や「シンポジウム」も開催しました。

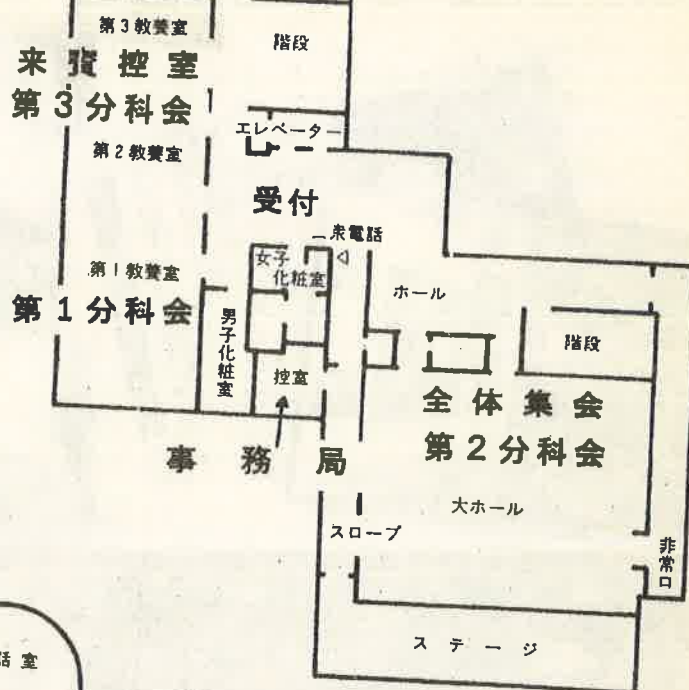
展覧会の入場者5,473人、証言を聞く集いに462人、シンポジウムに328人と予想をはるかに超える多数の参加があり、展覧会は大きな成果をあげました。

後日、朝日新聞の「声」に48歳の日本人女性が次のような感想を寄せました。

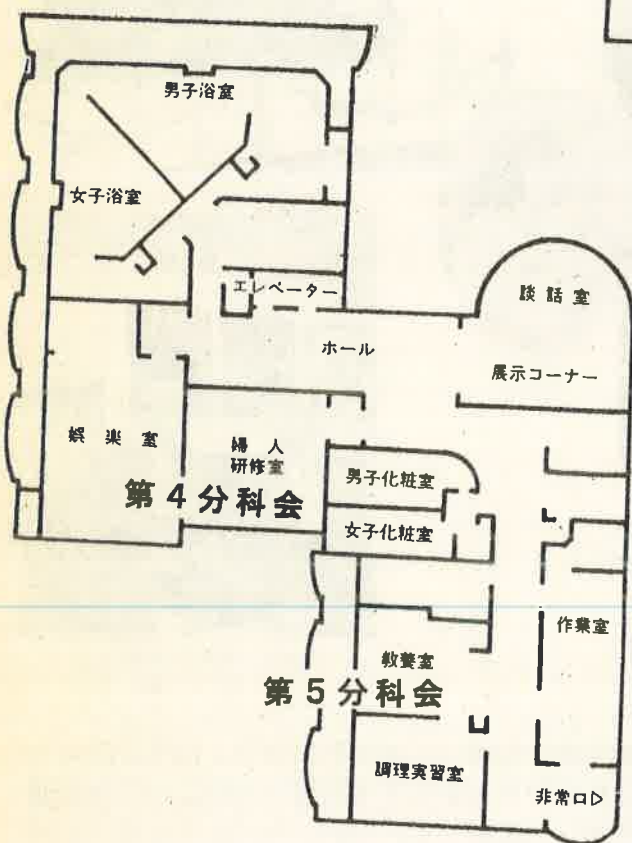
「証言者が『本当の歴史を教えることによって、未来志向的な友好親善が生まれるのです』と言われました。その言葉は私の心を少し明るくしました。歴史の真実をしっかりと見つめ、加害責任を認め、戦後補償をしてこそ、日本と韓国や朝鮮民主主義人民共和国およびアジアの国々との新たな信頼関係が生まれるのだと強く思いました」。

会場案内図

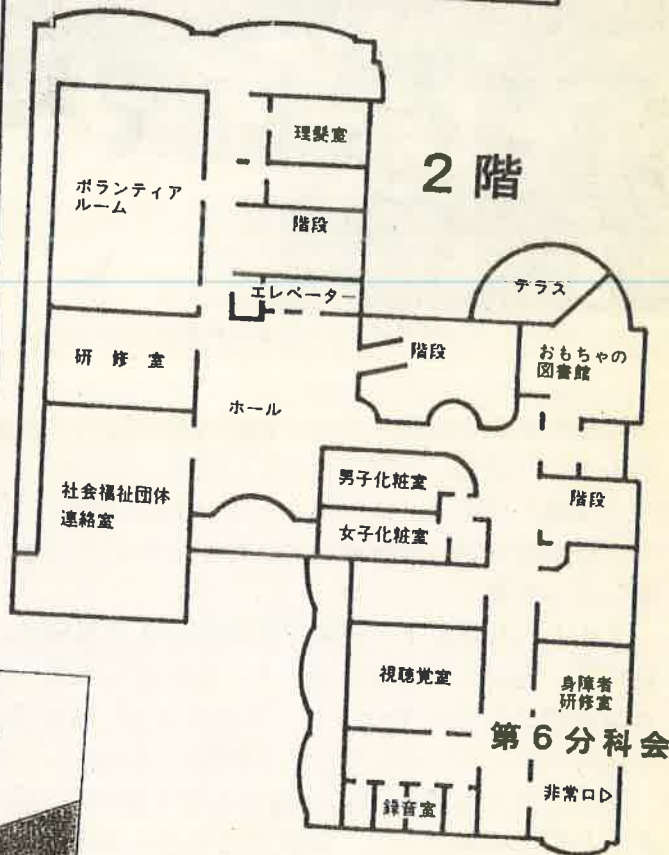
4 階



3 階



2 階



会場～ホテル マップ

